

静岡県三ヶ日町の能・狂言装束

一 はじめに―三ヶ日町の能の沿革

静岡県引佐郡三ヶ日町はみかんの一大産地として有名である。現在三ヶ日町で能は行われていないが、江戸時代前期までは大福寺・摩訶耶寺・宇志八幡宮などで能が行われていた。江戸時代前期に三ヶ日に在住し、この地区の能を指導したのは服部三左衛門正信・服部源右衛門友清という二代にわたる服部姓の喜多流の役者であった。現在も続く新城富永神社の能が喜多流であるのは、この服部親子の指導を受けたことも大きい。服部父子の事跡に関しては、故大原紋三郎氏の『新城能楽補遺』⁽¹⁾に詳しい。大原氏は「服部父子の残したこの花は残念ながら三ヶ日では衰えたが、新城に根づいて爛漫と開花して現在に至っている。私は、三ヶ日の能楽は新城の能楽の母であると思っ

ている」と記されているが、それだけの内容を三ヶ日の能はもっ

ていたのである。

先年、三ヶ日町教育委員会に同町岡本区の能装束が保管されていると伺い、昨年より調査させていただいた。この報告書にここにまとめさせていただきたい。担当は、「一 はじめに―三ヶ日町の能の沿革」を飯塚恵理人が、「二 三ヶ日の能狂言装束から」を正田夏子が、「三 意匠・被服構成」を高橋春子が、「四 織物の組成」を鈴木貴詞がそれぞれ担当し、まとめた。本稿の責任は全員が負うものとする。

最初に三ヶ日町の能の沿革について先行研究をもとに述べてゆきたい。三ヶ日に古くから翁が行われていたことは、青柳瑞穂氏所蔵の父尉面について、後藤淑氏が、

父尉。研究者にはすでに周知のものである。東京の青柳瑞穂氏が所蔵されている。裏面に墨銘で

飯塚 恵理人
正田 夏子
高橋 春子
鈴木 貴詞

大福寺

常什

正和五年 丙辰 十月八日

とある。一具式面三百という意味は未詳だが、この大福寺が三ヶ日の大福寺であることは、青柳氏が昭和十年頃三ヶ日町の摩訶耶寺からもとめられたものといわれていることから知られる。摩訶耶寺も聖武天皇天平十八年孟夏、行基菩薩の草創と伝える古い寺で、江戸時代貞享五年頃まで能が行われていた（中略）木造彩色の秀作で、特に変わった点もないが、正和五年（一三一六）といえは在銘の能面では最も古いものの中に入り、そういう絶対年代をおさえるという意味では注意してよいものである。

と述べておられる。この面が作成された年にはすでに翁が行われていたと考えるのが自然であろう。また、大福寺は、能楽に使用する面を五面所蔵している。後藤氏は、これらの面について、

大福寺所蔵面がいつ頃からのものであるかは明確でない。

大福寺所蔵の覚書には、

覚

一、翁面 三面

一、小面 一面

一、修羅面 一面

右此度宝納仕候宜御受納

可被下候

（中略）

明和五子九月五日荻野大八（黒印）

大福寺

御役者中様

とあって、五面が荻野大八から奉納になっている。この面が今日伝来のものと同じであることは、現存のものと覚書の能面の種類・数が一致している点から想像される。修羅面にあたるものは、現存面では飛出である。しかし、その製作年代については全く不明である。

大福寺に能があつたことは、『新城聞書』に、

宝永五戊子歳浜名郡服部三左衛門裏野林ニテ勸進能興行、二月九日、十日、十一日、十二日以上四日間、所望ノ事有テ十三日ニモ勤ム、役者ハ浜名、長篠、新城、其他処々ヨリ来レリ、（中略）

とあることから想像される。この覚書の服部家は能楽師の家であり、『新城聞書』に見える服部三左衛門は覚書の服部家で大福寺所蔵の能楽師ではなからうかと思う。（中略）なお、『遠江国風土記伝』を見ると、その大福寺の条に、

扇山、高さ五十町、幡教寺跡あり、礎石墳墓古池有り、寺を神戸郷に移して以来正月八日に神事能舞ありしも、元禄八年以来停止す。

とある。幡教寺とは大福寺のことで、大福寺の能は江戸中期にすでに衰運の状態にあつたことがわかる。大福寺ともこの町内におけるきつての古刹である摩訶耶寺でも能が行われており、同じく『風土記伝』（飯塚注）『遠江国風土記伝』の摩訶耶寺の条に「毎年正月七日、神事の能舞ありしが、貞享五年以来停止す」と記してある。と述べておられる。

中世における三ヶ日の翁・能については記録がないので定かではないが、翁を中心に神事として行われていたと考えるのが自然であろう。三ヶ日の鎌倉時代の芸能としてはむしろ舞楽が主体で、それが徐々に能に移行してきたのであろうことは高橋佑吉氏が、

舞楽が鎌倉時代末には既に大福寺摩訶耶寺で法会供養などの際屢々行われていたことが大福寺文書に散見し、例えば弘安五年 二二八二 二月大福寺が舞童を摩訶耶寺に遣して同寺の法会を遂行させたこと（大福寺摩訶耶寺本末相論文書案）、応長元年 二二二一 十一月二十七日、八日に大福寺御堂供養に大がかりな舞楽があつたこと（大福寺御堂供養記）又

は元応二年 二二三〇 二月五日大福寺衆徒等が舞装束借用起誓文を立てたこと（大福寺舞装束借用起誓文）などでも分明であり、更に室町時代末の永正年中高天神城主福島氏が大福寺へ宛てた書状数通の中にも同寺の正月行事延年舞の事等が見えている

と述べておられることから伺われる。この「延年舞」は舞楽ではなく「翁」もしくは「能」と考えるほうが自然であろうが、福島氏の大福寺宛の書状を未見であるので判断はできない。大福寺には、少なくとも天和四年以前には、本格的な能舞台が存在した。このことは、大福寺所蔵文書に

乍憚奉願事

一 当寺本尊薬師堂、其外諸堂及大破造立仕候依之、此度於 江戸御頭中様江宜様ニ被為仰上、遠州舟明山御樽木五千挺拜借ふき替仕候様ニ奉願候。代金之義者、何時成共 公儀御直段相定次第指上ケ可申候。御前様如御存 御代は当寺より例年御納豆差上ケ申御事ニ御座候。可然様御取成被仰上拜借相叶候様ニ奉憑上候。以上

遠州濱名

天和四年子ノ二月廿八日

大福寺（印）

秋鹿長兵衛様

名牒奉願事

一 當寺本宮樂師堂其外積堂及大破造立付取
 之此處於 江戸御時中松尾重政公御代
 明山御時本五子提相備少智徳公御代
 合し義有河村公六 公儀少重取相定なる中
 上中御時中御時中御時 御代々當寺より例
 納定なるより御時中御時中御時中御時中
 備おけし奉願事とす

天和四年二月廿八日

秋鹿長兵衛宛

大福寺

秋鹿長兵衛宛

能堂之覚

- 一 葉師堂 七間四面 とちふき
- 一 鎮守 四間三間 とちふき
- 一 鐘樓 式間四面 とちふき
- 一 舞台 四間三間但シ橋懸り五間
- 一 同樂屋 五間三間 何茂こけら<ふき也
- 一 門 五間三間 とちふき
- 一 二王門 六間四間 とちふき

写真1 天和四年二月廿八日付秋鹿長兵衛宛大福寺願書

諸堂之覚

- 一 葉師堂 七間四面 とちふき
- 一 鎮守 四間三間 とちふき
- 一 鐘樓 式間四面 とちふき
- 一 舞台 四間三間但シ橋懸り五間
- 一 同樂屋 五間三間 何茂こけら<ふき也
- 是は 天下為御祈祷毎年正月八日二能仕候
- 一 門 五間三間 とちふき
- 一 二王門 六間四間 とちふき

以上

とあることから伺われる。ここに記される舞台は四間三間とあるので、三間四方に後座のついた形であろう。橋懸り五間というのも正式な規格とおりである。五間三間の楽屋も備えており、本格的な能舞台であったと考えられる。この文書は駒澤大学戦国史研究会の方々の調査で発見されたものであり、この地域の能楽を考える上で重要な資料であると思われる。大福寺・駒澤大学戦国史研究会の皆様のご許可をいただき、ここに影印と翻刻を挙げさせていただいた。

この大福寺の能が衰えた原因については、「重修浜名史論」¹⁵¹⁾に、

大福寺の能について江戸初期服部正信を指導の中心とし

て興隆していたのが中期以後衰えて行つた原因経過に付いては大福寺文書の告官文録に「寛文元年 一六六一 二月同寺の神事能興行の時、その棧席が旧来三ヶ日町安形刑部右エ門 中ノ郷家ノ祖 等の党上席であつたところ、地頭近藤家の役人達が之を占據したので乱闘の争乱を引越した為その実状を具して中泉代官秋鹿内匠に訴えた」趣が記されており、又瑠璃山乗の天和五年 貞享二年 一六八五 の記事に、「同五年是より先 何れの年よりといふこと不明 毎年正月八日能興行之処是年狼藉之事有之此已後永く相止」とあり、直接にはこの様な原因が主であると考えられるのではない。そして遠江風土記伝に記す「大福寺・・移寺於神戸郷以来正月八日有神事能舞元禄八年以来停止焉」、「摩訶耶寺・・毎年正月七日有神事能舞貞享五年以来停止焉」、「八幡社在宇志村神田高拾五石八月十五日神事能舞貞享五年以来停止焉。」の記事となるのではないか。また更に明和五年正月十二日の大福寺大火による同寺及び服部邸の焼亡が致命的な打撃となり、遂には同年九月五日の服部家伝来面の同寺奉納となり、更には十三年後の安永十年 天明元 一七八二 二月の服部家 荻野家 の所有地の同寺への寄進処理となつたかと想像されるのである。

とある。この記事によれば、神事能興行の際の争乱が直接能を

衰えさせた原因となるが、三ヶ日在住の役者としてこの地区の能を指導した服部三左衛門正信と服部源右衛門友清は、寛文元年以降もこの地区に居住して能に携わっている。このことを考えると、「神事能」という正式な催しとしては行われなくなつたとしても、個人の稽古や囃子会、内輪の能の催しは継続されていたと考えるのが自然であろう。能が衰えた理由は、直接には明和五年の大福寺大火が原因であろう。しかし、その当時の三ヶ日の村人の人数や産業など、さらに調査する必要がある。

二 三ヶ日の能狂言装束から

茶地菊格子丸模様 袷狩衣 丈154・0 衿64・0cm

(調査番号1)

表は茶の木綿か。紅白の型染めで菊花を、緑で格子と竹を表す。緑の部分は殆ど剥落し、一部欠損している。裏地はノボリの部分が浅葱の麻、その他は中表の仕立てで、欠損部から見た様子では大型の更紗風の唐草が型染めで表されていると思われる。

また、後見頃の裾より、11〜12センチごとに幅1センチ、長さ5〜6センチの薄い木材が両脇それぞれ6箇所縫い込まれている。両脇からほぼ均等な位置より板に穴を空けて両端の布部分に綴じ付け、その所在が確認できる。当初は梯子状に渡つ

ていた状態で完成されたものが中央部分は折れて脱落した可能性がある。脱落したと思われる木片を採集したところ桧材（あるいは杉材か）と考えられ、全体が柿渋紙で包まれた上一部文字が散見される。用途は不明。

黄地丸紋尽し模様 素袍 丈90・0 衿95・0 cm

（調査番号6）

白抜きに丸紋を染め分け、中に三つ巴、輪宝、角取かたばみ、藤の丸、槌車、花入亀甲、木瓜の丸の模様を描き絵で表す。本品は木綿だが、ほぼ同じ意匠で麻の袴（長袴・調査番号16）があり、それから写した後代の作とも考えられる。

単なので素袍に分類したが、両端袖の袂に露紐を付けた糸（浅葱色）の跡が認められた。現行の能装束では直垂には露を付け、直垂より略装の扱いになる素袍には付けない決まりである。丸紋尽しの装束の多くは狂言に用いるので、この装束も恐らく狂言用か。胸紐は絹で後補。

茶地鶴模様 素袍 丈70・0 衿86・0 cm

（調査番号5）

茶地の上に白の型染めで鶴を大紋に表す。胸紐は萌黄。裏地は袖口の部分にのみ幅14センチ、浅葱の布が付く。

上記の通り完全な単ではなく、また、大紋の意匠から「直垂」として使われた可能性も考えられる。両前身頃の部分を肩

先から胸元に向けて引き絞った仕立ては、素袍から両袖が取れて肩衣が誕生してゆく経緯を感じさせるもので、一般の服飾では遺例が少なく貴重。全体を同色でなく、浅葱に染めた糸で仕立てている点も特異。

紅地草花格子鶴亀の丸模様 袴 丈75・0 衿30・0 cm

（調査番号13）


上下で一具とみられる肩衣と半袴の装束。木綿。裏地は白、紅地の上に藍で草花の変り格子、その格子の間に鶴と亀の丸紋を型染めにし、金彩を施している。彩色は恐らく金泥であるが、殆ど剥落している。

肩衣は前身頃も後ろ身頃と同じ丈の四角形に仕立て、その後、肩山から胸前に向けて脇を畳み、引き絞ったような形で肩衣独特の襷を作っている。畳んだ部分はそのまま細長く折り込み、数箇所浅葱色の糸で縫いとめて胸から身頃の裾へ続く。生地が何層にも重なっているため、かなり厚ぼったい身頃になっている。このような仕立の肩衣は肩衣の形態が確立した天正期のスタイルであり、名古屋では尾張徳川家の家康八男・松平仙千代（1595—1600）の肩衣などで存在が確認されている。また、能装束としては「側次」が室町期に「袖無」との記載で登場するところから、この装束は側次から肩衣へと途中で変えられた可能性も残る。しかしながら同じ三ヶ日の装束で三

つ輪違いの紋を付けた袴の肩衣（調査番号15）が同じ仕立てであったところから、製作年代は下つても、三ヶ日の地域に中世の縫製技術の名残があり近世へ持ち込まれた可能性が高い。

三ヶ日町の能装束 調査リスト一覽

- | No. | 種別 | 名称 | 素材・特徴など |
|-----|-------|--------------|--|
| 1 | 袷狩衣 | 茶地菊格子丸模様 | 裏地は麻の捺染、中袷で更紗風の唐草模様。菊は白と朱の型染 |
| 2 | 袷狩衣 | 紅地金欄菊唐草龍丸模様 | 裏地は麻、白 |
| 3 | 素袍・上 | 萌葱地鶴模様 | 型染の大紋。麻。袖口部分のみ同色の裏地あり。胸紐は茶の麻 |
| 4 | 素袍・下 | 萌葱地鶴模様 | No.3と対の一具と考えられる。腰紐、前後とも同色の麻 |
| 5 | 素袍・上 | 茶地鶴模様 | 型染の大紋。麻。袖口部分のみ同色の裏地あり。胸紐は萌葱の茶、前身頃の部分を近世の肩衣のように胸前で絞った仕立て |
| 6 | 素袍・上 | 黄地丸紋尺模様 | |
| 7 | 側次(?) | 黒地金欄雲竜模様 | 模様型染(三ツ巴、輪宝、カタバミ、藤の丸、槌車、花入亀甲、丸に木瓜)胸紐別布、後補か?
右袖付き部分に紙縫 |
| 8 | 半袴 | 浅葱地亀若松竹模様 | 脇、両裾に合引が付くが別布
裏地白、麻。畳表の入った大口仕立。腰紐浅葱
意匠、模様は型染 |
| 9 | 半袴 | 金茶地亀若松竹模様 | 裏地白、麻。畳表の入った大口仕立。腰紐萌葱
意匠、模様は型染 |
| 10 | 大口 | 萌葱地 | 無地、裏地白。畳表の入った大口仕立。前腰裏に紙札あり・墨書「をか本村大口」 |
| 11 | 肩衣 | 紅地金欄と納戸綸子段模様 | 金欄は菊、牡丹唐草。綸子は山道に蕙の模様をそれぞれ織り出す |
| 12 | 肩衣 | 紅地銀欄 | 銀欄は牡丹、菊、梅の模様を織り出す |
| 13 | 袴・肩衣 | 紅地草花格子鶴亀の丸模様 | 裏地白、模様は型染、地に金彩を施す(泥、箔いずれか不 |

- 明)
- 14 袴・半袴 紅地草花格子鶴亀の丸模様
裏地白、模様は型染、地に金彩を施す（泥、箔いずれか不明）No.13と対の一具と考えられる
- 15 袴・肩衣 黄地丸尺模様
裏地無し、黒で三ツ輪の紋「」、No.6と同様の意匠
- 16 袴・長袴 黄地丸紋尺模様
No.15と対の一具
- 17 肩衣 白地茶小紋
変わり葵の紋か？紙の肩裏あり
- 18 肩衣 浅葱地鮫小紋
紙の肩裏・鮫小紋
- 19 縫箔 白綸子地に竹橋若松模様
綸子の地模様は紗綾形に蘭。竹は藍の型引田。裾、紅絹のふき
- 20 袴・肩衣 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。亀甲正は岡本八幡宮の社紋
- 21 袴・長袴 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。No.20と対の一具
- 22 袴・肩衣 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。亀甲正は岡本八幡宮の社紋

- 23 袴・長袴 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。No.22と対の一具
- 24 袴・肩衣 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。亀甲正は岡本八幡宮の社紋
- 25 袴・長袴 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。No.24と対の一具
- 26 袴・肩衣 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。亀甲正は岡本八幡宮の社紋
- 27 袴・長袴 黒地亀甲正紋
裏なし、麻。No.26と対の一具

三 意匠・被服構成

ここでは、装束の模様の技法および仕立上げ寸法表を述べる。

(一) 装束の模様の技法

○「繡い」（刺繡）による模様の技法について

1 繡箔 白綸子地に竹橋若松模様（調査番号19）

綸子には地模様が織り出されていて、さらに「繡い」と「染め」により模様が表わされている。この意匠は清楚ななかに派手やかさが感じられるもので、江戸時代の小袖にもみられる。なお、「繡い」の技法は単調であり模様の柔らかさを表わしている。この技法はまた繡佛などにもみられ、桃山時代の小袖など

にも用いられている。つぎに模様表現の技法については、

(1) 綸子地は綾織で、紗綾型・蘭文様が織り出されている。

(2)の① 生地の上に用いられた「繡い」は、金茶色・萌黄色・金色などで松・竹・橘などの模様を表わしている。

(2)の①のイ 花卉の「繡い」には金茶色の平糸(一本十二菅)を用いて「繡い切り」をし、柔らかな花卉に優しさをみせている。

(2)の①のロ 葉脈の「繡い」は萌黄色または金茶色の平糸(一本十二菅)を用いて「まつり繡い」および「引きとじ」をし、やや太めの柔かい線を表現している。

(2)の①のハ その他の花卉・葉などの「繡い」を金糸(七掛)で「駒詰繡い」をしているが、なかには輪郭のみの「駒とじ」もみられ、豪華さを加えながら全体の構図および平糸との組み合わせが、美しく豊かでおおらかである。

(2)の② 生地の上に用いられた「染め」は、藍色の「型染め」で竹・橘などの模様を表わしている。

2 「染め」(染色)による模様の技法について

1 「染め」の技法は「型染め」による。裕狩衣(調査番号1)・繡箔(調査番号19)その他すべての調査資料の「染め」は「型染め」である。ただし「織文様」を除く。

3 「織り」(織物)による模様の技法について

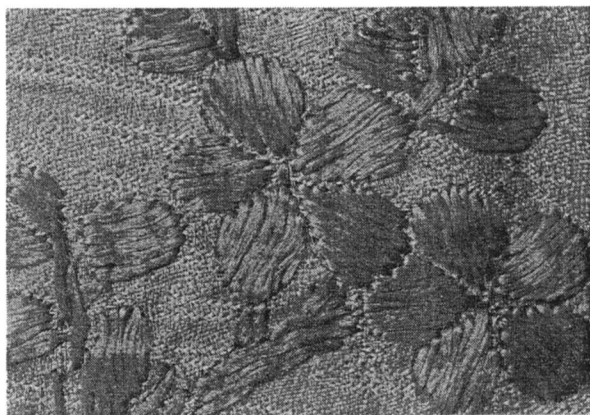
裕狩衣(調査番号2)・側次(調査番号7)・側次(調査番号11)・肩衣(調査番号12)は織糸による模様表現である。

なお、本稿を草するに当って、今井むつ子編『日本の刺繡』(毎日新聞社 昭和五十一年)、見藤妙子著『見藤妙子作品集』(菜根出版 昭和五十六年)を参考にさせていただいた厚く感謝申し上げます。

19、繡箔の刺繡

花卉・葉脈の模様
平糸でまつり繡い

葉の模様
金糸で駒詰繡い



絞り模様型染

(二) 装束の仕立上げ寸法表

衿肩明	あげ首 下り	後幅	前幅	おおくび			衿幅	紐	
				丈	上幅	下幅		下前身ごろ	
15.5 (左右)	16	30.5	14	107	14	14	4.5	表前幅中央に肩から2下って付ける。丈26直 径0.3、緑色 表衿端に付ける。丈16.5、水色	
15.5 (左右)	16	28	13.5	112	13.5	13.5	3.6	表前幅中央に肩から3下って付ける。丈17直 径0.3、緑色 表衿端に付ける。丈16.5、水色	

前幅	衿下	衿幅	胸紐			色彩			背模様			抱・袖模様		
			紐付下り	丈	幅	地	模様	胸紐	下り	経	緯	下り	経	緯
20	8	5	16.5	63	3	萌葱	鶴文白	茶	6.5	13	13.7	袖付11	13.5	33.5
			紐付は紐幅の中央を衿付縫目に											
胸6.5 裾5	左7.5 右8.5	5	17	63	3	茶	白	萌葱	17	6.3	3	袖付10	13.5	33.5
20.5	10	5.8	25	24	1.5	黄	エンジ 水色・白		丸紋散点文様					
			紐付は衿裏に											

前脇幅	寄襲幅		笹襲幅	後紐		前紐		襦		素材	布幅 前奥布 前脇布 後布 32	色	仕立て方
	上	下		丈	幅	丈	幅	形態	大きさ				
18.5	3.6	7.2	4.1	左70.5 69.5	3.5	左156 157	3	四角	22	木綿	萌葱	単 手縫い	

縁布			素材		布幅		色・模様		仕立て方
衿幅	脇丈	脇幅	表	裏	表	裏	表	裏	
2.5	50	2.5	金欄地 絹	木綿(前身ごろ表へか えして左11.5右7)	33	33.5	黒地・紅平金 糸雲龍文	白	衿 手縫い

背明き	素材		布幅		色		仕立て方	
	表	裏	表	裏	表	裏		
8	絹	木綿	36	28.5	段接ぎ合 わせ	白	衿 手縫い	
9	絹	木綿	38	28.5	紅	白	衿 手縫い	
-	木綿	-	31.5 背中入れ15.5	-	茶型染め		単裏肩当て和 紙丈30幅32	前襲 和紙入り
9	木綿	-	30 背中入れ13.5	-	青型染め		単裏肩当てあ り	前襲 和紙入り

表1 狩衣仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	袖丈	袖幅		袖付		身丈		肩幅	前肩幅
			鱗袖	奥袖	後	前	後	前		
1	茶地菊格子丸模様	68.5	30	30	20.5 肩山から2 下る	-	153	123	31(左右)	7
2	紅地金欄菊唐草龍丸模様	69	57		20	-	137	126	28(左右)	7
上前身ごろ		袖口		素材		布幅		仕立て方		
表衿端に付ける。緑色裏側に付ける。水色		四つ打ち組、白色丈20、直径0.7		木綿		木綿・史紗 おおくび・絹		58	29	単 手縫い
表衿端に付ける。緑色裏側に付ける。水色		四つ打ち組、白色丈90、直径0.7						32	32	単 手縫い

表2-1 素袍仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	袖丈	袖幅			身丈		肩幅	衿肩明	後幅
			鱗袖	奥袖	袖付	後	前			
3	萌葱地鶴模様	62	26	31.5	21.5	74		29	9	29 脇は耳
5	茶地鶴模様	63	25	30	21.5	84		29	9	29
6	黄地丸紋盡し模様	69.5	32	32	29.5	82	86	30.5	10	31 脇は耳
素材		布幅	袖口布			仕立て方				
地	紐		素材	色	幅					
木綿	木綿	32	麻	白	13	単 手縫い				
木綿	木綿	32	絹	白	13.5	単 手縫い				
木綿	木綿	33				串 手縫い				

表2-2 素袍下衣仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	紐下		相引	股上		股下	後幅	後腰幅	前腰幅
		後	前		後	前				
4	萌葱地鶴模様	131.5	125	68	44	37	67.5	31	26	30.5

表3 側次仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	身丈	肩幅(左右)	衿肩	後幅	前幅	脇			衿丈
							紐付	紐丈	紐幅	
7	黒地金欄雲龍模様	70	43.5	15.5	29.5	15.5 下端耳	50	8.5	8.5	62 (肩から)

表4 肩衣仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	身丈		肩幅	後幅	前幅	襷下り	衿下	衿肩明	衿幅
		後	前							
11	紅地金欄と納戸縞子段模様	70	76.5	左右で64 34.5	34.5	6.8	30	9	9.5	3
12	紅地銀欄	70	82	左右で74 37	37	6.5	26	11.5	10.5	3.2
17	白地茶小紋	74	78	左右で70 35	34	7	26	-	8	3.2
18	浅葱地鮫小紋	69	79	左右で82 41	40.5 裾33	7.5	28	-	8	3

背明き	素材		布幅		色		仕立て方
	表	裏	表	裏	表	裏	
8.5	木綿		31	31	紅地 黒緑	白	袷 手縫い

前腰幅	前脇幅	寄襲幅		笹襲幅	紐丈		紐幅	素材		布幅		色・模様		仕立て方
		上	下		後	前		表	裏	表	裏	表	裏	
26.5	15	3.2	6.5	3.5	77	15	2.7	木綿		31.5		黒地・紅 平金糸 雲竜文	白	袷 手縫い

背明き	紋					素材	布幅	色	仕立て方
	紋下り		大きさ		名称				
	背	抱	たて	よこ					
	4.5	14.5	3.6	4.1	三つ輪の 紋型染	麻	31	黄	単 手縫い
	5.5	14.1	8.8	7.8	染抜き	麻	33	黒	単 手縫い

高さ	前腰幅	前脇幅	寄襲幅		笹襲幅	後紐		前紐		腰板紋
			上	下		丈	幅	丈	幅	
8.3	33	18.5	3.7 (平均)	6.5 (平均)	5	64	17 腰板布つ づき	140 右のみ	3	三つ輪の紋、墨で手描 き上から1.6下がり幅 の中央に
9.5	29	18	3.7 (平均)	6.5 (平均)	4	67	3	130	3	中央に正紋 染抜き

前腰幅	前襲幅	紐				襦		素材		布幅		色		仕立て方
		後	前	丈	幅	形態	大きさ	表	裏	表	裏	表	裏	
上52のうち紐付け 27.5襲6 (内襲4)	前腰に6 個と	72	2.5	130	2.5	四角	17	木綿		33		黄	白	袷 手縫い

合複幅	衤下り	衤肩明	衤下	衤幅	素材			布幅		仕立て方
					表	裏	形態	表	裏	
13.5	15	8	64	12	紅絹 紋縹子	紅絹 (裾回し丈32.5、ふき3、豎 襟丈83、袖口布幅6)	白	32		袷 手縫い

表5-1 袴肩衣仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	身丈		肩幅	後幅	前幅	襷下り	衿下	衿肩明	衿幅
		後	前							
13	紅地草花格子鶴亀の丸模様	68.5	74	30	30	5.5	19	9.5	10	44

表5-2 袴半袴仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	紐下		相引	裾の高さ	乗間	後幅	後腰幅	腰板			
		後	前						幅		裏	高さ
									上	下		
14	紅地草花格子鶴亀の丸模様	88	81.5	25	35	34	28	21.5	14.5	21.5	白	8.7

表6-1 袴肩衣仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	身丈		肩幅	後幅	前幅	襷下り	衿下	衿肩明	衿幅
		後	前							
15	黄地丸紋盡し模様	64	74	左右で57 28.5	28.5	25	25	8		8.3
21	黒地亀甲正紋	69.5	83.5	左右で63 31.5	31.5 20上で 裾27	7.6	32.5	10.5		9.5

表6-2 袴長袴仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	紐下		相引	股上		後幅	後腰幅	腰板	
		後	前		後	前			幅	
									上	下
16	黄地丸紋盡し模様	129	126	73	33	29	30	26.5	16.5	26.5
21	黒地亀甲正紋	146	142	76.5	56	52	30	21.5	14.4	21.5

裾		素材	布幅	色	仕立て方
形態	大きさ				
四角	23	麻	31	黄	単手縫い
後布から裾へつづく					
四角	14	麻	31	黒	単手縫い

表7 半袴仕立上げ寸法・意匠・構成

資料NO	模様(名称)	紐下		相引	股上		股下	後幅		後腰幅
		後	前		後	前		上	下	
								52	31	
9	半袴(大口仕立)	80.5	76	21.5	37	33	26	(左右) 芯入り		上52のうち紐付け 10.5、布にギャザーをよせる

表8 縫箔

資料NO	模様(名称)	袖丈	袖幅	袖付	袖口	身丈	後幅	前幅	肩幅	衿幅
19	白縮子地に竹橘若松模様	44	29	44	21	151 ふき3 154	30	29	28	17.5

四 織物の組成

装束の素材は、麻・絹・綿が使用されており、資料15、16、17、18、20、21の組織は平織で麻糸を使用した麻織物である。

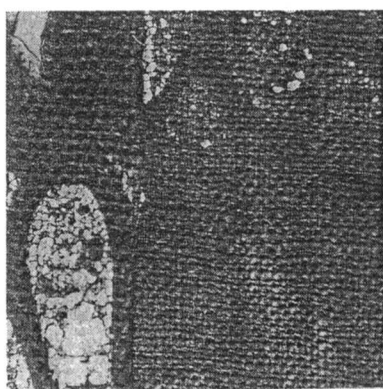
資料2、7、11、12の素材は絹糸で、組織は麻織であり、文様は金箔糸で織出されているが、資料2、11の文様の一部には絹の染糸が使われており、資料11は金欄と無地で文様のある絹織物と段継ぎで仕立てられている。資料7は文様の余白の部分が黒色に染められている。(淡茶の絹糸(地糸)で製織後に)

資料19は文様が型染と刺繍(撚金糸と染絹糸)によって絹織物(紗綾形の文様の生地)に表はされている。

資料1、3、4、5、6、8、9、10、13、14の素材は綿糸を使用した綿織物である。組織は平織で、糸は経糸、緯糸共に単糸で、糸の状態から手紡糸ではないかと思はれる。

資料1の衣装の「おおくび」の中心の部位(A・B)で、写真の様に、糸の番手の違ふ綿織物が、縫ひ合わされており、経・緯糸の密度は写真での表の通りである。(文様の型は同じである)

裏地に綿織物の白生地等が使われているが、その織物は表地の綿織物と同じと思はれる。



B | A
写真 1、袷狩表

	A	B
経密度(本/cm)	19.5	15.5
緯密度(本/cm)	18.0	11.0

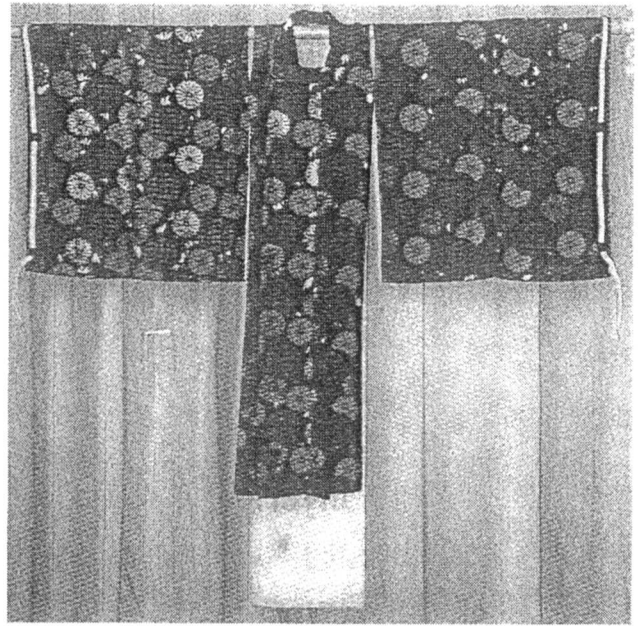
1、おおくびの
A・Bの密度

資料 No.	種別	地素材	組織	密度(本/cm)		撚方向	
				経	緯	経	緯
1	袷狩衣	綿	平織			右	右
2	袷狩衣	絹	綾織				
3	素袍・上	綿	平織	17.5	15	右	右
4	素袍・下	綿	平織	17.5	15	右	右
5	素袍・上	綿	平織	19.5	17	右	右
6	素袍・上	綿	平織	16.5	10.5	右	右
7	側次	絹	綾織				
8	羊袴	綿	平織	16	12	右	右
9	羊袴	綿	平織	16	12	右	右
10	大口	綿	平織	17	15	右	右
11	肩衣	絹	綾織				
12	肩衣	絹	綾織				
13	袴・肩衣	綿	平織	13	10	右	右
14	袴・羊袴	綿	平織	13	10	右	右
15	袴・肩衣	麻	平織	22	16.5	右	
16	袴・長袴	麻	平織	22	16.5	右	
17	肩衣	麻	平織	20	19.5	右	
18	肩衣	麻	平織	20	18	右	
19	縫箔	絹	綾織				
20	袴・肩衣	麻	平織	17.5	14.5	右	
21	袴・長袴	麻	平織	17.5	14.5	右	

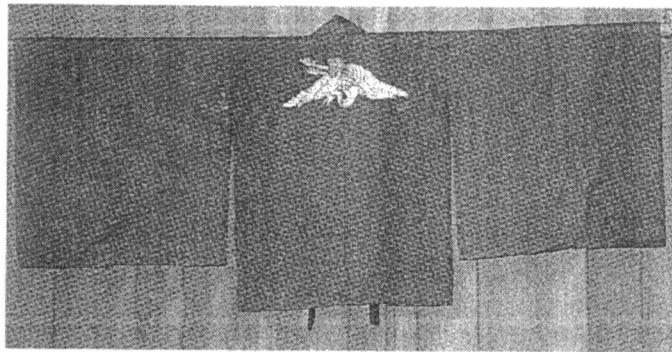
表 織物の組成



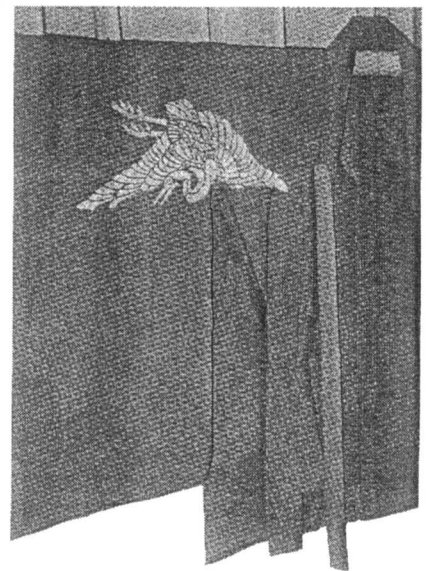
19、繡箔 白綸子地に竹橘若松模様(後)



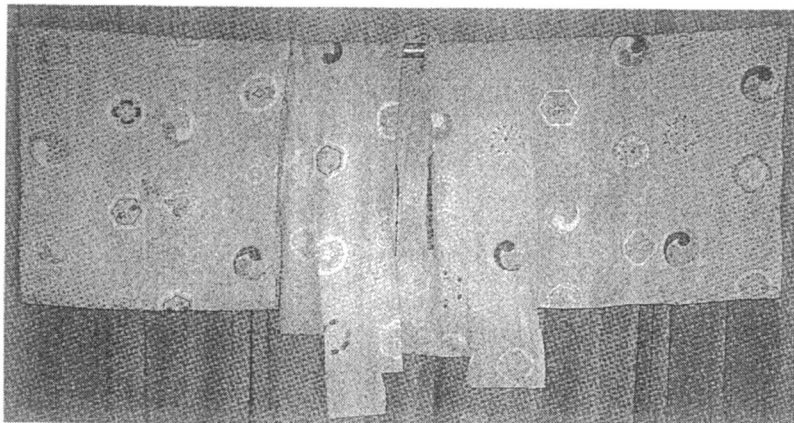
1、袷狩衣 茶地菊格子丸模様(前)



3、素袍 萌黄鶴模様(後)

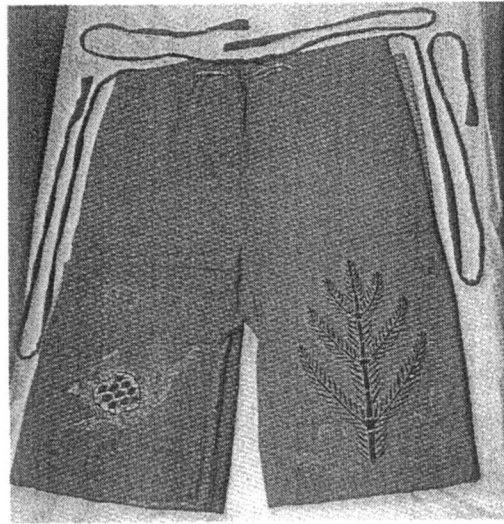


5、素袍 茶地鶴模様(前)

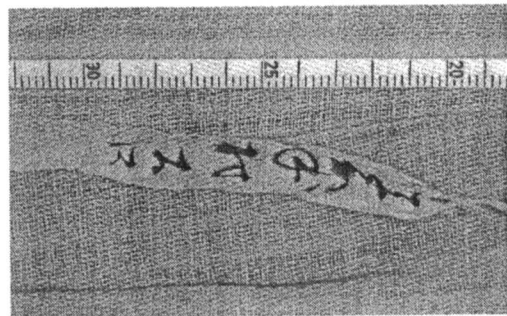


2、素袍 黄地丸紋盡し模様(前)

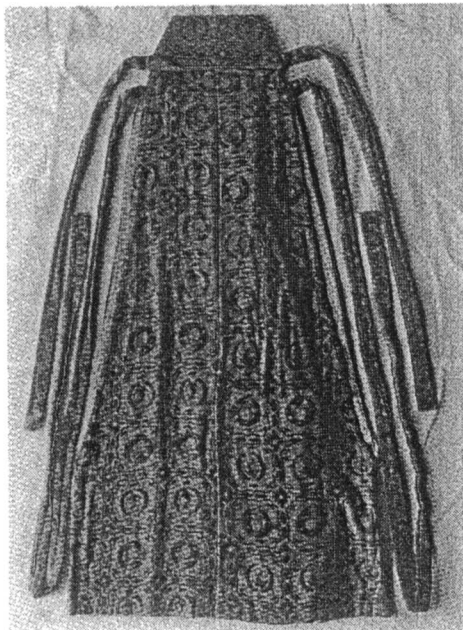
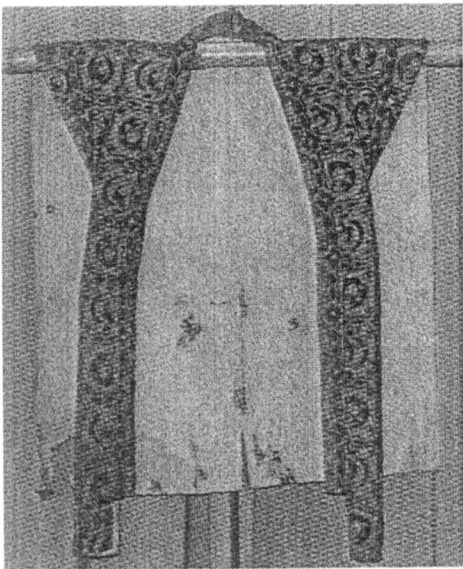
9、半袴 金茶地亀若松竹模様
(大口仕立)



10、大口の紙札



13・14、袴 肩衣 半袴 紅地草花格子鶴亀の丸模様



1 注

『新城能楽補遺』大原紋三郎著 平成十年五月発行 私家版 「第六 三ヶ日大福寺・服部父子二代の能楽」一三八―一五〇頁、二〇七頁。引用部分は一四九頁

2 『能面史研究序説』後藤淑著 昭和三十九年一月発行 明善堂書店 二九頁

3 同注2 一六頁

4 『重修浜名史論』下巻 高橋佑吉編著 昭和五三年二月発行 浜名史論刊行会 四九九頁―五〇〇頁

5 同注4 五〇一頁

補記

三ヶ日町の能装束は、平成十五年九月六日から十九日まで、衣の民俗館において「三ヶ日町の能装束展」という形で展示されました。貴重な装束の閲覧・調査・借用・写真掲載を許可いただきました。三ヶ日町岡本区・三ヶ日町教育委員会の皆様により感謝いたします。また貴重な書状の掲載・翻刻を許可いただきました大福寺の皆様、資料を教えてくださいいただきました駒澤大学戦国史研究会の皆様、駒澤大学の広瀬良弘先生・久保田昌希先生・塚田博先生、資料の翻刻の際にご教示いただきました栗花光弥氏・蟹江和子氏・都筑敏人氏により感謝いたします。三ヶ日の能の存在を教えてくださいました、故大原紋三郎先生、三ヶ日町教育委員会へのご紹介の労をとっていただきました大原正巳氏に心より感謝いたします。本稿は平成十五年度高梨奨学財団研究助成、平成十五年度日本学術振興会研究助成金基盤研究(C)(2)「東海地域能楽資料の収集と整理」の成果の一部となります。

この地方は東海道路交易の場として、葛(くず)が生産されるので葛布が織られていた。現在もなお掛川に葛製品がみられる。したがって、能・狂言装束の素材に見る麻のみでなく、葛布の使用されているものを追求が必要であるろうかと考え、向後の研究課題としたい。

(安城市錦町一―一八)

(東京都杉並区浜田山四―二一―一八―三〇二)

(名古屋市中区大針一―二〇四)

(尾西市三条道東二)